

僕はヒーローなんだから（試 読版）

吉宗

序

爆発の音。火薬の香り。粉塵の衝撃。

それらを背に受けて男は瓦礫の上に立っていた。右手を空に掲げ、左手は腰の辺りで拳を握り、そして何かを叫んでいる。しかしその声は周りにはよく聞こえない。全身タイトのような服にフルフェイスのヘルメットのようなものを被った男はその後も言葉を続けていた。少しして男は脚に力を入れると、空へと飛び上がる。

「カーット」

誰かの叫びに合わせて飛んだ男の着地点にマットが広げられ、男は背中を向けてそのマットの上に落ちた。衝撃を殺し、勢いよく立ち上がる姿を見た一人が周りに声をかける。

「オーケーでーす」

「カメラチェック入るぞー」

同じ誰かの声に反応して周りの人間が声の主の方へ集まる。男もヘルメットを脱いで走り出した。が、すぐに足を止めると周りを見渡す。そして目当ての人を見つけると手を振って呼びかけた。

「おーい佐倉あー何番テントー？」

「三番だよー常磐も急いでー」

声に反応した佐倉と呼ばれた青年は振り向きながら言葉を返すと、常磐と呼ばれた全身タイトの男はもう一度佐倉に手を振り、教えてもらった三番テントの方向へ駆け出した。それを見送ると佐倉も自分の仕事へ戻る。仕事場は先程爆発した場所だ。軍手を手に着けると瓦礫を退かし、一本の道を作ることができるようにする。できたら今度は持ち運べるように巻かれた線路を運び込み、それを敷く。そしてその線路に滑車をつけたカメラを走らせる。常磐が全身タイトを着て立つであろう場所にマーカーを刺し、一度その場をぐるりと滑車に乗って回る。カメラと滑車の動きを確かめる。腰に刺してあった冊子を広げて問題はないと記す。佐倉は自分の腕時計に目を向けた。午後1時。休憩時間だ。佐倉が息を吐くのと、佐倉の携帯電話が鳴り響くのは同時だった。

「はい」

「おーう佐倉、ちょうど休憩か。だが残念、仕事だぞーい」

野太い男の声が携帯から聞こえた。佐倉は少し目を細め、静かに「了解」と応じると、その場をあとにした。

佐倉の所属する企業名とその隣に『撮影キャンプ』と書かれた看板を通り過ぎ、佐倉は目の前にあった大型トレーラーへと向かった。荷台に背をつけて、扉を拳の甲で叩く。静かに開いた扉に滑り込むように入るとそこはおおよそトレーラーの荷台の中とは思えない空間だった。

側面に埋め込まれた多数の液晶、飾るように壁に並べられた朱色と白色で彩られた鎧、小窓から見えるトレーラーの運転席には黒人の男が丸いレンズのサングラス越しに佐倉を見ていた。液晶の前に置かれたキーボード、それを指圧だけで壊すのではないかと思えるほどに強く叩いていた青年が佐倉の入車を確認すると、壁越しに運転席にいた黒人の男に声をかけた。

「佐倉さん到着です、ランディ、お願いします」

「おう任せとけ」

ランディと呼ばれた男がニヤリと笑うとトレーラーはゆっくりと発車する。トレーラーが動き出すと青年が液晶を指差した。

「ここから10キロほどの場所にアナザーが出現する予定です。出撃お願いします」

「わかったよシンビー、早く準備をしよう」

そういうと佐倉は服を脱ぎ捨てた。そして壁に掛けてあるジャケットを羽織ると、その上から壁に並べられた鎧のようなものを着付けていく。両手両腕両足腹胸と装着すると佐倉の首から下はアメリカンヒーローのような姿になっていた。

更に壁に埋め込むようにあった大きな筒と板のようなものを背負うと、いつもの指定の位置に立つ。そしてヘルメットを被ると鎧から駆動音が鳴り出した。鎧の、人間で言う眼にあたる部分が光り、ヘルメットの中のコンピューターが作動する。佐倉も足首、指と自分の感覚を確かめる。すべての作動を確認したところでランディが楽しそうに声をあげる。

「おうそろそろお客さんここに着くぜー」

「わかった。じゃあ、いってきます」

鎧を着た佐倉が頷き返事をすると、シンビーも続けてトレーラーの後ろの扉を開く。上から下へ開いた扉は走り続けたままの地面に接触して火花を散らす。ヘルメットの中にある画面に『READY』と表示された。

「ヒートラック、行きます」

鎧の足の裏に内蔵された車輪、脛脛から射出され踵に装填された車輪とモーターが駆動音を唸り上げる。ヒートラックと名乗った鎧姿の佐倉はその姿勢のまま後ろ向きに跳び上がるとトレーラーの車外に飛び出した。

重く響く着地音と更に火花を散らす鎧の着地点、その衝撃に耐えると佐倉は前へと踏み出した。と同時に車輪が回転しトレーラーを追い越すように加速する。

隣を走っていた自家用車に乗っている子どもが歓声をあげる。

「あっ！ヒートラックだー！」

その子どもに手を振って、佐倉は『現場』へと向かった。

続きは製品版をご覧ください